

臨床心理学に寄与する文献研究の 専門性と独自性について

井上 嘉孝

はじめに

文献研究はあらゆる研究にとっての第一歩であり身近なものでありながら、臨床心理学の研究法として文献研究そのものを取り上げた論考は数少ない。本稿では、いわゆる科学としては軽視されがちな文献研究について、改めてそれがどのように臨床心理学に寄与するのか、その意義と課題を多角的に検討していきたい。

方法としての文献研究

学問における文献研究の意義について、まず思いつくのは「先行研究のレビュー」としての位置づけであろう。Google が提供する論文検索サイト「Google Scholar」のキャッチフレーズが「巨人の肩の上に立つ」であることから分かる通り、私たちは先人の学問的知見のうえに立って、自分ひとりでは届かなかったところに手が届き、自分ひとりでは見えなかった先を見渡すことが可能になる。

英米の文献研究をメタ的に文献研究した大木ら（2013）によれば、文献研究とは「一定の手順と技術に基づいて実施される、それ自体が独立した研究方法論」として位置づけられている。そして「文献レビューのトレーニングは、文献検索（情報収集）能力、文献の品質評価能力、各種データの統合力、オリジナリティの創出力、

学術的作文能力など、研究に必要な基礎的能力を習得する機会として有用」であり、大学院生（学位論文の執筆）では「必須の素養」とされている。

文献レビュー literature reviews / Review とは、先行研究に関して、それぞれの関連性、矛盾点、相違点、不整合などを確認することを通じて、当該研究分野においてどのような知見が共有されているか、何が問題点なのかを文献を通じて明らかにするものである。文献レビューの能力は、確かにどのような分野においても研究者に必須の素養だろう。ただし、先行研究を概観する「文献レビュー」＝「文献研究」だと捉えられるとき、それは既にわかっていること（およびわかっていないこと）を確かめる作業であり、個性的で創造的なプロセスからは程遠いもののように思われるのではないだろうか。研究としての価値や独創性も、一段劣るものとして見られても致し方ない。

しかし、文献研究は文献レビューのほかにも、いくつかの種類に分類される（APA, 2010/2011. 大木, 2013）。ひとつは、メタ分析 meta-analyses / Systematic Review と呼ばれるもので、先行研究を整理し直すことで、当該分野の研究が暗黙裡に前提としているパラダイム（枠組み）を俯瞰的・批判的に検討するものである。メタ分析的な手法を用いた文献研究としては、理論論文と方法論論文が挙げられる（APA, 前掲書）。こ

れまでの理論発展の跡をたどり、批判的検討を加えて、これまでよりも高い完成度の理論構築を目指す論文は理論論文 *theoretical articles* と呼ばれ、新たな方法論的アプローチや既存の方法の修正、量的分析すなわちデータ分析のアプローチに関する議論を研究者に提示するものは方法論論文 *methodological articles* と呼ばれる。メタ分析は、既存の枠組みを批判的に検討することによって、多少なりともそれを乗り越えていく作業となる。それゆえ、研究としての独創性の程度はさまざまであるが、当該分野における学術的貢献は大きいと考えられる。

文献レビューとメタ分析に加えて、希少資料の発掘を通じた文献研究（以下、希少文献研究と呼ぶ）も挙げられるだろう。例えば、歴史家の網野義彦によって古民家から発見された古文書が新しい歴史観を提供したり（網野, 2005 など）、ユングによって錬金術の文献から心理療法のプロセスとの相似性が読み解かれたりする（Jung, 1946/1994 など）といった仕事が良い例であろう。今まで日の目を見なかったような文献資料が発掘され、そこに専門家の独創的な視点によって新しい光が当てられることで、これまでにない重要な知見が生み出される。希少文献研究には、文献資料の希少性はさることながら、専門的で独創的な視点が不可欠な要素となる。

心理学の方法と科学性、学術性

言うまでもなく、哲学、倫理学、歴史学、文学、言語学、論理学など多くの人文科学では、文献研究は主要な研究の方法となっており、文献に基づいて自らの学問領域と独自性を定位している。それは、人文科学 *humanities* が人間の所産を研究対象として人間とは何か探究する学問群だからであり、その最大の特徴は、研究

の対象を研究主体としての人間とは独立に存在する純粋な客体として位置づけることができないという点にある。

しかし、研究対象を研究主体と切り離し、客観的に取り扱えないという特徴がネガティブなものとして捉えられるとき、自然科学を模したいわゆる科学的で客観的な研究方法が目指される。それとともに、文献研究は必然的に独自の研究方法としての価値を見失われる。

周知のとおり、科学の一分野であろうとするために、心理学は自然科学を範としてその研究方法を構築してきた。それに関連して、やや長くなるが、日本学術会議が2002年に「日本学術の質的向上への提言」として心理学研究の問題点を指摘した文章を以下に引用する。

心理学研究に携わる学生は、「心理学研究」の方法論と技術の習得に追われて、心理的に興味のある問題を独自の考えで探求するという余裕がなく、またそのような訓練をほとんど受けなまま大学院生、さらには研究者になる。したがって、そのような研究者の「論文」も、「方法がしっかりしている」、「正しい手続きで実験され、正しい統計的手法でデータ処理がなされている」という点でのみ評価され、学会論文も、そのような「手続き的に文句がつけられない論文」だけが採用されることになる。(中略) 実際、わが国の心理学研究は、当初から結果が予想されるような「仮説」を、「厳密な手続きで検証」しただけのものがきわめて多い。学術的にはほとんど意味がない。(中略) わが国の心理学研究は、人間の心理や行動に関して新しい心理学的問題を提起するものがほとんどない。それは先に述べた「手続き主義」的な研究風土も原因だが、大学での心理学教育の中で、学生独自の「問題発見」や「仮説づくり」の訓練の場がほとんどない。

(日本学会議 学術の在り方常置委員会,
2002. 傍点筆者)

心理学研究に対する辛辣な批判であり、明確な問題提起である。ここでは、研究の「方法」や「技術」が厳密であっても、それだけでは学術的に意義のある研究にはならないこと、独自の「問題」や「仮説」が提起されなければならないことなどが指摘されている。言い換えれば、学術的意義や研究の価値とは、演繹的・論理的に正しい結論を導き出す作業もさることながら、個性的で独創的で創造的な仮説生成のプロセスにこそ重きを置かねばならない。

とは言え、この提言で主に前提にされている研究とは、そもそもがいわゆる科学的な手法をとった心理学研究¹⁾、すなわち操作的定義によって構成概念を作り出し、それを実験や調査などを通じて測定し、数値化したデータを統計的手法によって取り扱う量的研究であろう。したがって、心理学研究における文献研究の位置づけは、ここでは明らかにされていない。極言すれば、心理学の研究方法としては、文献研究は無視されているとさえ言っても過言ではない。

さて、心理学のなかでも、臨床心理学はとりわけ厳密な科学とはなりがたい面をもつ。なぜならそれは、人間の主観的体験や個別性、クライアントとセラピストの関係性やプロセス、さまざまな治療・査定技法、治療構造や枠の問題、事例を取り巻く家族関係や環境など、複雑な要素が絡み合った実践によって成り立っているからである。そうした臨床心理学のなかでも、認知行動療法 CBT は科学的であろうとする指向性をもっているものであり、いわゆる科学的に実証された「エビデンス」のある治療技法のほとんどが CBT である。ただし、アメリカ心理学会の臨床心理学分科会 (APA Division12) が、

「最適なアプローチは、必然的に臨床家 Clinician の専門性と患者の価値観・特性を組み合わせて決定される」と明記していることには留意が必要である。つまり、科学的な研究方法を用いて得られた「エビデンスの実証された治療技法」(ESTs/RSPT) と、それに基づいて特定のクライアントとセラピストの間で行われる「エビデンスに基づく実践」(EBP) とは必ずしも同一視するべきものではない。“実践科学としての臨床心理学は、その中核に個別の実践を含むが故に、必然的に不確実性と複雑性をその特性として含んでいる” (斎藤, 2018, p29)。

このように臨床心理学の実践をクライアントとセラピストの個別性に立脚するものとして明確に捉えてみると、複雑な実践のプロセスに基づいて、観察者・研究者の主観を含みこんだまま、そこに何らかの法則・論理・理論を見出していこうとするような、広い意味での「科学性」が臨床心理学には求められているといえよう (河合, 1992)。それゆえ、研究主体と研究対象との、人と人との関係性を切り離れた、いわゆる自然科学の手法を範とした研究方法のみならず、人文科学の知、社会科学の知、さまざまな研究とその手法が模索されるべきであり、そうした多様な研究の視点が、多様なクライアントと向き合う臨床心理学という営みに資するものと考えられる。

臨床心理学の研究と対象

臨床心理学とは、何よりクライアントに資するものでなくてはならない。実践のための理論でなくてはならない。それゆえ、セラピストにとっての最良の師は、間違いなくクライアントである。実際、セラピストは実践の場から学び、実践において感じ、気づき、考えたことを研究に活かし、そしてそれをまた臨床実践に還元し

ていく。

さらに臨床訓練においても、ケースカンファレンスやスーパーヴィジョンといった体験的・実存的な学びが重視される独特のシステムがある。臨床心理学においては理論だけでなく、実践の技術・技法、さらにはセラピストとしての態度、セラピスト個人の人格や個性が一体となって訓練が進んでいく。子育て本から子育てを学ぶことに限界があるように、知的に知っているだけでは臨床心理学の学びは実践の役には立ちづらい。

したがって、代表的な学術雑誌である『心理臨床学研究』を見てもわかる通り、日本の心理療法において伝統的に重視されてきたのが事例研究である²⁾。その次に誌面を占めているのが、量的研究や質的研究である。『心理臨床学研究』のなかの論文カテゴリーとして最も学術的価値のある「原著」、その次の「研究論文」、それに続く「資料論文」のさらに後の「文献展望」として文献研究は位置づけられることが多く、その数も少ない³⁾。

この20年間、文献研究として『心理臨床学研究』に掲載されている論文には、文献レビュー（例えば下津, 2016. 浅野, 2018）や理論論文（例えば祖父江, 2004. 千葉, 2016）、方法論論文（例えば佐々木, 2005）などがある。しかし、これまでになかった資料を発掘する希少文献研究は見られない。文献研究という手法を取って『心理臨床学研究』に掲載されている論文はどれも良質と思われるけれども、その数の少なさは、文献研究が独創的な臨床心理学の研究として提示されることの困難さを示している。したがって、臨床心理学における多くの研究は、事例や調査などのデータをもとにして、研究としてのオリジナリティを担保している。しかし、研究方法としていかに整っていたとしても、その知見が臨床心理学に真に寄与するものであるだろう

か、改めて日本学術会議の2002年の提言を今一度振り返る必要がある。また、近年、『ユング自伝』が実は自伝ではなかったことを明らかにしたり（Shamdasani, 1995/2011）、『赤の書』（Jung, 2009）を始めとするユングの貴重な一次資料を編集・公刊しているソヌ・シャムダサーニは、心理学史を専門とする歴史家である。先述した通り、ユングによる一連の錬金術研究は金字塔であるが、歴史家のみならず、臨床心理学の専門家によって希少文献研究がなされることは、これから期待される分野であろう。

筆者はこれまで、主に文献研究の手法から、吸血鬼のイメージについて深層心理学的な探究を行ってきた（Inoue, 2011. 井上, 2007; 2013など）。この一連の研究で中心的に取り扱った「吸血鬼イメージ」とは、元々臨床事例のなかで、筆者が担当したクライアントが夢のなかで報告したものである。考察を深めるほどに、一人のクライアントのこころによって表現されたそのイメージは、そのクライアント個人にとって極めて重要であるだけでなく、広く現代を生きる人びとの苦悩ともつながるものであると考えられた。換言すれば、筆者の吸血鬼イメージに関する研究は、個人的なこころとその表現を、事例そのものの内容を詳らかにすることなく、いかにして普遍的な観点や議論の俎上に載せられるかという取り組みでもあった⁴⁾。その他にも、筆者は文献を主たる素材にして、臨床心理学の観点、臨床体験からの気づきを言語化することを試みてきた（井上, 2010; 2015; 2016; 2019; 2020）⁵⁾。これらの考察はどれも臨床事例での気づきに基づきながら、守秘などの観点から、決して臨床事例研究としては取り上げられない研究であった。

臨床心理学の領域では、研究においても臨床においても、事例や調査、インタビューなどで得られた実際のデータが重視されることは間違

いない。歴史学者や文学者と比べて、臨床心理学者が文献研究によって自らの研究の独自性を担保することは容易ではない。ともすれば、臨床心理学における文献研究とは、実存的な学びができない机上の空論に過ぎず、実際のデータに基づく研究ができないがゆえの代替案や次善の策に過ぎないと捉えられてしまう可能性がある。

しかし、データや事例そのものを示さずに特定のテーマについて検討していくためには、そのテーマのみならず、そこから派生した数々の文献と格闘し、ひたすらそのテーマについての読みと考えを深めていく必要がある。こうした取り組みの結果が客観的な説得力や価値を持つか否かは読み手に委ねるしかない。しかしながら、データや事例によって語らしめるのではなく、研究者がひたすら文献を読み込み、特定のテーマと格闘し、それについての考察を深く掘り下げていくプロセスは、自らの視点を磨き上げる作業であり、改めて研究者＝臨床家自身の臨床へと還元されることは間違いない。研究対象と専門的視点をもって格闘し、自らの読みと考えを深化させること。それを最も確かなことばで言語化すること。臨床家にとって臨床実践のみならず、研究が重要な専門業務であるということの意味はここにあるのではないだろうか。

素朴な実践と専門的な理論

臨床心理学において、「理論」と「実践」は車の両輪であるとしばしば指摘される。これについて、精神分析家 前田重治は「面接は理論(知識)を学ぶことと、経験をつむこととはともに大切であり、それは車の両輪である。ただしその両輪は同じ大きさである必要はなく、私の教育経験からいうと、「読書三分に、経験七分」

といった割合がいいのではなかろうか」(前田, 2003, p117)と述べている。前田がここで言うところの「理論」とは、科学的な研究の知見というよりも、個別事例や理論的文献に学ぶことであるといえる。実践経験にやや重きが置かれているけれども、文献に学ぶとともに実践経験をつんでいくことの大切さが示されている。

先に述べたように、臨床心理学の実践は、人と人の関係性や偶然性などといった複雑な要因を孕んだプロセスである。しかしながら、特殊な技法を除いて、その実践は基本的に「耳を傾ける」「遊ぶ」「共に居る」などという極めて素朴な方法によって成り立っていることにも注目しなければならない。こうして一見、誰でもできるような素朴な方法をもちいるからこそ、臨床心理学の実践には「理論」が非常に重要な意味をもつといえる。不登校児に親が箱庭用具を一式買って与えたら治療的なのではない。理論的背景や視点、態度をもったセラピストが素朴な方法をもちいて関わるからこそ、それが治療的に働きうるのである。

素朴な「実践」と、専門的な「理論」との関係について、ユング派分析家の猪股剛による以下の指摘は刮目すべきものである。

文献研究の道筋は、現在から始まって、過去を通じて、未来に至ろうとする。自然科学ならば、研究室における今日の実験を通じて... 過去を丁寧に振り返ることなく、明日へ明日へと向かっていくことも許容される。過去への真摯な態度を失えば、学問の地平が成立しないだけでなく、臨床心理学のような実学は、現在の強度に翻弄され続けるだけである。(猪股, 2006, p105)

臨床実践や現場の経験は、臨床心理学にとって何より大切で、何にも代えがたい学びとなる。

そうであるからこそ、臨床教育において各種実習が尊重されている。臨床そのものは、決して文献では学べない。だがしかし、日々の実践があるということによって同時に、私たちには「現在の強度に翻弄される」可能性がある」と指摘される。

治療効果研究という臨床心理学の研究領域がある。特定の技法に基づいた特定の疾患への介入に治療効果があるか検証したり、あるいは技法間の心理治療をメタ的に分析したりする。ここでは症状の改善、社会適応などが治療効果の指標として用いられる。その結果の蓄積は、「エビデンスの実証された治療技法」(ESTs/RSPT) となっていく。

しかし、先述したとおり、「エビデンスの実証された治療技法」(ESTs/RSPT) と「エビデンスに基づく実践」(EBP) を決して混同してはならない。実際の個々のクライアントに対する治療実践は、特定の技法や理論に基づく治療効果の要因に加えて、クライアントのみならずセラピストの個性、相性・関係性、周囲からのサポート、さらには偶然の事象などなど、複雑な要因が絡み合ったプロセスとして成り立っている。

換言すれば、素朴な方法をとった複雑なプロセスだからこそ、そのプロセスの成否を「治る」とか「よくなる」といった素朴な効果の観点だけで見てはならず、理論的な視点が必要になる。傾聴・受容・共感を大切に日々綿々と継続されてきた日本の心理療法の営みは、東畑(2020)によって「HAP = 平成のありふれた心理療法」と称され、「ユニギアン化したロジャリアン」と擲揄された。この「HAP」の最大の問題点は、彼の指摘する「サイコロジカルトークの無さ」という現象面もさることながら、臨床実践が「現在の強度」に、つまり素朴な方法と素朴な効果(「話を聴いて治る」)に翻弄され、

専門的で理論的な視点を伴う「学問の地平」を共有できていなかった点にこそあると考えられるのではないだろうか。

そこで例えば河合隼雄は、心理療法の目的を「悩みや問題を解決すること」ではなく、「悩みや問題の解決のために来談した人に対して... 来談者が人生の過程を発見的に歩むのを援助すること」と記している(河合, 1992, p3)。松木邦裕もまた、その仕事は「クライアントの苦痛を除去することではない」と説く。曰く、精神分析的な心理療法の目的は、「クライアントの苦痛を持ちこたえる能力を高めること」にあり、苦痛や不幸をこころのなかに抱えられることがあって初めて私たちの真の健やかな生き方がなし遂げられる(松木, 2011) とする。

もう少し具体的な例を挙げると、臨床心理学の専門家は、たとえばプレイセラピーの場で、泣いている子どもに母子分離を促す。不安や恐怖を抱えたクライアントに対して、不安や恐怖の対象から回避することを制止し、むしろ暴露することを促す。もちろん後者の行動療法は「治る」ことを目指しているわけだが、これらの例からわかるのは、クライアントの心の成長や変容を促すために、臨床心理学の専門家は表面的なヒューマニズムやセンチメンタリズムを越えた理論的要請をもとにして臨床実践を遂行しているということである。実のところ、それは決して素朴な方法と効果の観点から成り立つものではない。

しかしながら、自戒しつつ記すならば、現場でひたすらに臨床実践を続けていると、いつのまにか専門性を手放して、苦悩からのインスタントな解放を目指した「サービス業」に墮すことがあるのではないだろうか。もちろん、クライアントが苦悩から解放されることは決して価値のないことではない。クライアント自身は何よりもまずそれを望んでいる。セラピストの多

くは、そうしたクライアントの気持ちに真摯に懸念に向き合っていることは間違いない。けれども、臨床心理学の根幹には、苦悩からのインスタントな解放とは異なる理論的要請、専門的視点があるということも忘れてはならない。この意味において、臨床心理学の学問的地平は、自然科学のそれとは次元を異にしているといえる。なぜなら自然科学は、素朴に人間や社会の役に立つことを目指しているか、あるいはそうした価値判断を留保している（科学技術や発見がどのように活用されるかは、それをを使う者の価値判断に委ねている）からである。

臨床心理学は、臨床を何より大切にする。臨床の現場で日々実践に明け暮れ、クライアントに役立つように働き続けることは、臨床家にとって最も大切なことである。しかしながら、臨床現場とは専門性が容易に翻弄されるほどの強度をもっている。柔軟で臨機応変の対応をしつつ、専門性を維持するためには、現象を捉える視点が必要である。心理学 psychology とは語源的に、こころ／魂 psyche の論理 logos であり、病や症状、苦悩などとしてあらわれてくる現象レベルの問題を、こころあるいは魂の論理のレベルで考える学問である（Hillman, 1964）。現象に耳を傾け、寄り添い、対話しつつ、同時にそれを心理学的に見通す。臨床心理学においては、経験から学び、データによって研究を積み重ねるだけでなく、それらの経験やデータをどのように積み重ねるか、どのように読み解くか判断するための理論とその学びが欠かせない。

文献から臨床のエッセンスを学ぶ

臨床実践は文献からは学べないと考えられがちである。しかしそれに関して、精神科医でユング派分析家でもある角野善宏が語ったエビ

ソードはたいへん興味深い。中井久夫のもとで研修医として学びたいと会いに行ったときこと。角野は、対面した中井から「私のところに直接学びに来なくても、私の著作集を読めば十分に学べますよ」と告げられる。そして、そのことについて、“牽制されたということもあったかもしれないが、それだけではない。臨床的センスは書物からも学べる”（矢野・桑原編, 2010, p34）と述懐している⁶⁾。

私たちは文献を通じて、臨床の何をどのように学ぶのだろうか。いわゆるハウツー本ではなく、書物を通じて実践や理論を深く学ぶとはいかなることか。哲学者ショウベンハウエルは、『読書について』（1859年）で次のように語っている。

読書は他人にもものを考えてもらうことである。本を読む我々は、他人の考えた過程を反復的にたどるにすぎない。紙に書かれた思想は一般に、砂に残った歩行者の足跡以上のものではないのである。歩行者のたどった道は見える。だが、歩行者がその途上で何を見たか知るには、自分の目をを用いなければならない。

確かに、私たちは中井の著作を「読む」ことによって多くを学ぶ。中井の創案した描画法である「風景構成法」を現場で使うこともできる。「心のうぶ毛」や「パラディグマティック／シタグマティックな選択」という臨床的な観点を知ることでもできる。しかし、そうした方法や観点に至った中井の臨床的センスを学ぶことがどれほど困難か、その著書に目を通したことがあればすぐわかるだろう。的確で鋭い観察と深く豊かな感性、自然科学や人文・社会科学、ひいては芸術領域にまで及ぶ該博な知識、それらを踏まえた中井の体験と思考のプロセスは、誰しもたどれるものではない。文献を通じて「歩

行者のたどった道」を見ることすら極めて難しいのである。

しかしながら、それでは中井から臨床実践の指導を受ければ、その臨床的センスが学べるのかということ、それはどうだろうか。スーパーヴィジョンやケースカンファレンスといった臨床実践指導の場は、セラピストを育てる場でありながら、何よりも個別具体的な事例のことを考える場である。クライアントに対する見立て、それに応じるセラピストの個性や感性、両者の相互作用とそこに入り込んでくる偶然性の要素、さらにはクライアントを取り巻く家族や周囲の状況など、様々な要素を総合して、あくまでその事例に資するための検討がなされる。もちろん、事例に対する態度や空気から学べることは大きいのだが、スーパーヴィジョンやケースカンファレンスでの検討は、個別の事例に対応するものであり、その内容を安易に一般化することはできないことが多い。

対して、著作は個別事例での経験を総合して記されている。それは卓越した精神療法家や熟練の心理臨床家による臨床経験のエッセンスである。そこで描き出される臨床的な観点、概念、そして理論は、仮にすぐ「用いる」ことはできたとしても、読者にとってすぐに「身になる」ようなものではない。教科書や手引きとして読まれてはならない。

先述したアメリカ心理学会の臨床心理学分科会（APA Division12）は、ホームページでそれぞれの精神疾患や症状に対応して実証された治療法のリストを挙げているが、そこに「特定の治療法を推奨するわけではない」し、「このリストにないからと言って、その治療法がエビデンスをもたないと示しているわけではない」という但し書きを付けて注意を促している。つまり、ガイドとなるエビデンスはあったとしても、実際の個別事例は、それぞれのクライエン

トとセラピストの対話と工夫によって進められる。このことから敷衍するならば、臨床心理学の文献は、仮に教科書や手引きのように書かれていたとしても、安易に一般化してはならず、個別の取り組みが欠かせないということがいえるだろう。

臨床経験のエッセンスとしての文献は、読み手の経験と照らし合わせて繰り返し咀嚼することによって、読み手自身がそれを自らの血肉としていかななくてはならないものである。つまり、逆説的であるが、臨床心理学の文献は「すぐに役に立ちそうにない」からこそ、私たちはそこから深く学ぶことができるといえるのではないだろうか。

「歩行者がその途上で何を見たか」を見るために「自分の目をいなければならぬ」。中井は臨床の途上で、その体験と思考のプロセスの中で「風景構成法」を見出した。そこで大切にされているものは何か。翻って、自分はどうか。この事例ではどうか。このような視点から見ると、たとえば中井の記した「風景構成法」は単なるひとつのツールではない。それは中井の臨床／視点のひとつの〈現れ〉であり、エッセンスであり、私たちの臨床／視点を問うべき何かなのである。そのようなものとして文献は臨床心理学的に読まれうる。単なるツールとして使われるのではなく、読み手である臨床家に自家薬籠中のものとして「風景構成法」というものが取り入れられていくまでの歩みは、例えば角野（1998）や古川（2015）などの仕事にその好例を見ることができるであろう。

文献と臨床実践の隔たり、その可能性

文献（研究）と臨床（実践）は連続したものではなく、話す／聴くことと読む／書くことの違いには大きな隔りがある。しかしながら、

この隔たりは臨床心理学にとってむしろ可能性でさえあると考えられる。

文献(研究)は、基本的に書き言葉である。第三者性を持ち、公共的である。一方、臨床は話し言葉で成り立つ営みであり、「今ここ」「私とあなた」の二者関係、多義的なイメージや非言語表現などで構成されている。第三者として読んだ文献の意味を、どのようにして<私>自身や二者関係の世界につなぐのか。<私>が自らの主観的体験や内的世界に照らして読み解いた<それ(ら)>の意味を、どのように第三者に伝えるのか。ここに臨床体験を心理学へと昇華していく、文献研究の可能性があると見える。

西平直は、芸能を生きた世阿弥が「風姿花伝」という理論書を執筆したことを巡って、“文字言語である「風姿花伝」は、<体験の直接性>と<自己対象化>の往復運動の中に後継者を駆り立ててゆく仕掛けとしての可能性を持つ”と論じた(西平, 2010, p31)。これはまさに良質の臨床心理学的文献研究にも同じことがいえるだろう。そして最後に、以下のような一連の問いを私たちに投げかけている。「体験を理論化するにはしかるべき時があるのか。理論化された言葉から学ぶことにはいかなる意味と危険性があるのか。自己対象化しない、自らを自己反省的に意識しない直接体験は、いかなる場合に成り立つのか。直接体験と自己対象化の二重性、反転のダイナミズムは、いかに育ててゆくことができるのか。理論を学ぶ場合、読むだけでなく、書くことも必要なのか」(西平, 前掲書, pp31 - 32)。西平はこれらの疑問にあえて答えを出さず、私たちに問いを投げかけるかたちで締めくくっている。

これらの問いはすべて、臨床家にとっての研究に通底するものであろう。とりわけ臨床心理学における文献研究とは、言葉と臨床体験を照

合し、言葉にしにくい現象、感覚、感性、関係性などを言語化し、そして第三者にできるだけ共有しやすいように伝える作業である。質的研究が、インタビューによって対象となる体験を言語化し、その理解と考察を深めるという臨床実践とパラレルなプロセスによって進められ、事例研究が、そうした臨床体験を言語化・理論化することによって、没入していた臨床実践を俯瞰的に読み解く作業であるとすれば、文献研究は他者によって第三者に向けて書かれたものを読み解き、自らの主観的・二者関係的な体験に照らし、さらにその過程で見出されたものをまた第三者に向けて言語化していく、そうした体験と言語の、主観と客観の往復運動、没入と俯瞰の多重性・多層性を巡って進められるといえる。

換言すれば、文献研究と格闘することそのものが、臨床的な多重性・多層性を生きるための訓練となりうるのではないだろうか。西平が私たちに問いを投げかけたように、実践領域を文献研究することの困難さは、臨床心理学における実践と理論を磨き上げるための駆動力になるのではないだろうか。

「臨床の知」と「科学の知」の架橋

周知の通り、中村雄二郎は名著『臨床の知とは何か』において、近代科学・自然科学の知に対して、臨床の知の意義を示した。すなわち、近代科学は「普遍性」「論理性」「客観性」という、自分の説を論証して他人を説得するのに極めて好都合な三つの性質をあわせて手に入れ、保持してきた。その近代科学が無視・排除してきた<現実>の側面である「関係性」「多義性」「身体性」などを備えたものとして、「臨床の知」がある(中村, 1992)。

この中村の指摘は、臨床心理学の「実践」を

基礎づける重要な理論的背景となっている。しかしながら、「臨床の知」のもつ側面を大切にしつつも、やはり「普遍性」「論理性」「客観性」を無視することができないところに、臨床心理学の研究が抱える葛藤がある。言い換えれば、臨床心理学研究の課題とは、「臨床の知」と「科学の知」をどのようにして架橋するのかということである。

既述した通り、心理学は一般に自然科学の手法を模して、実験・調査などを通じて心の構成概念を測定し、そこで得られた数量的なデータを統計的に分析するという手法を主にとってきた。また近年は、質的研究法を中心として、関係性やプロセスを細やかに分析の俎上に乗せる試みも盛んにおこなわれるようになってきた。こうした心理学の研究における方法論的な挑戦はたいへん意義深いものと思われる。ただし、臨床心理学の研究は、「科学の知」に表面的に依存することで良しとしては決してならない。

文献研究もまた、「科学の知」と「臨床の知」を架橋しようとしてきた。しかし、文献研究は他の研究法とは異なり、自然科学の手法を安易に模倣できない。事例も直接用いない。こうした枷を負っている。しかし、だからこそ普遍性・論理性・客観性を担保しようとして、それぞれの研究者が個性を凝らして、さまざまな工夫を成してきたことに気付く。文献研究はデータによって語らしめることが難しいがゆえに、研究者の視点が問われ、それを読み手に問いかけることになる。〈私〉が〈それ〉を読み解きながら、客観性・論理性・普遍性をどう担保するか、第三者に向けてどう伝えるか、という臨床心理学という営みが必然的に抱えている矛盾の真っ只中に立っている。まさにそこにこそ、文献研究の難しさと価値がある。

近年の臨床心理学における興味深い文献研究の例を挙げてみると、例えば芝田（2021）は昔

話研究において、関敬吾が編纂した『日本昔話大成』に研究対象を絞り込むことによって、できる限りそれを網羅的に取り上げようと試みている。医学的な治験で行われる全例調査では、当該治療法の安全性やリスクが厳密かつ高い信頼性をもって検証される。芝田の研究は、こうした全例調査に類する堅実な手法を取って、文献研究のデメリットである恣意性をできる限り排することを狙ったものといえる。あるいは、バウムテストの根付きを哲学的・論理的に読み解いた鶴田（2020）の研究は、「実のなる木を一本描いてください」という素朴な実践の意義を根拠づける試みであり、バウムという描画領域のみならず、心理臨床のプロセスや動きを理論的に深化させることに寄与する視点を提供している。また、菱田（2019）による研究は、フィールドワークと文献によって箱庭療法の歴史的背景にある箱庭遊びと「造り物」の系譜という日本文化の伝統的深層を捉えたものであり、臨床心理学の専門家としては数少ない希少文献研究に近い独創的な価値をもつといえる。さらに、村上春樹の物語を通して思春期心性を読み解いた岩宮（2016）のように、臨床的な経験と発見、着想がベースにあり、それを事例ではなく、物語によって語らしめようとする物語研究は、河合隼雄による一連の仕事の流れを引き継いで、現代における深層心理学の意義を示すものである。筆者もこの系譜に基づいて、最近では物語による臨床心理学的な文献研究の可能性を「怪物イメージの深層心理学試論」として提示している（井上, 2020）。物語による臨床心理学的な文献研究の最大の利点は、専門家以外の人たちとも研究素材とその読みを共有できることであろう。そうした一般の人びとと共有できる物語をもとにして、臨床心理学の視点を広く伝えることは、臨床心理学の研究者／臨床家として重要な社会への貢献になりうると考える。

臨床心理学の視点が一般に伝わることには、たとえばマインドフルネスや自律訓練法、認知の修正といった知識や技法が共有されることによって、人びとのストレス低減や心理的健康の維持が図られるといった効果があるだろう。しかし、深層心理学の視点が共有されることの意味は、そうした効果とは異なる側面をもつと考えられる。これに関連して、歴史家である與那覇は、人文科学の意義について次のように指摘している。

人文系の学問というのは... 視座の転換—おおざっぱに言えば、脱・人間主義のセンスを身につけるためにあるんです。ふつうに暮らしているかぎり、私たちはどうしても「よい人間／悪い人間」のせいにして、因果関係の視点で物事を捉えてしまう。給料が上がらないのは社長のせいだ、消費税が上がるのは総理大臣のせいだ、というわけですね。... しかしそういう見方ばかりしていると... ほんとうは因果関係ではなく再帰性で決定されている、世の中の動きが見えなくなってしまう。(與那覇, 2018, pp201-2.)

フロイトが「人類の自己愛は、科学的研究から三度重大な侮辱を受けた。それは、コペルニクスによる地動説、ダーウィンによる進化論、そして無意識の発見である」(Freud, 1917 / 2010) と述べた通り、深層心理学は自我的な見方を転覆する。現実の見方を豊かに、多面的・多層的に、複雑に、そしていくぶん難しくする。臨床心理学が人間の苦悩に寄り添い、苦悩を抱えて生きる人びとの心の学問である以上、単に苦悩をネガティブなものだけ見ないことは臨床心理学に共通する立場であろう。

ちなみに、與那覇が用いた「再帰性」概念とは、社会学者のギデンスが明らかにした、人びとの認識が現実を作り出し、現実が認識を強化

する循環プロセスのことを指す。たとえば「みんながそうしてる」と言われるとき、当初はみんなでなかったとしても、その言説によって実際にみんなが動き、それが現実になる。こうしたプロセスは、個人の中でも自己暗示として、家族のなかでは家族システムとして働き、社会のなかではさまざまな流行や潮流が産み出される。

再帰性という概念は、個人や集団、社会を構成する心の動きを見つめる重要な観点のひとつであろう。そして心理学は、個人や社会における再帰性に非常に大きな影響を与えている。なぜなら「日本人は～」「男性／女性は～」「母親は～」「発達障害は～」といった心理学の言説は、再帰的に現実に影響し、さらにそれが再帰的に心理学の「実証的な」結果を産み出すことになるからである。そのように考えるならば、心理学の実証的なデータは、客観的な事実というよりも、再帰的な現実であるということを見逃してはならない。

心理学は人間に対して再帰的に働く。だとすれば、私たちは、データそのもの、現実そのものではなく、自分たちの体験と視点こそ問い直さなければならない。先ほどは没入と俯瞰の多重性と述べたが、現実やデータ、実践や研究にベタに関与する側面と、それをメタに問い直すこと。これが関係性のなかで人間が人間に対して働きかけを行う臨床家にとっての研究における、もっとも大切なことのひとつなのではないだろうか。そして心理学の研究をメタ的に研究すること、臨床心理学の学問的地平を明らかにするとともに問い直すこと、これもまた文献研究に課せられた使命であり、文献研究の価値であるといえる。

文献研究と研究者／臨床家の変容

「実践と断絶している」「データによって語れない」「自然科学を模倣できない」という文献研究のもつ特徴は、臨床心理学にとってむしろ重要な意味をもつ。没入と俯瞰、ベタとメタのレベルにまたがり、安易な解決を許されない葛藤状況に向き合い、自らの視点を問うことこそ、まさに個々人の多様な矛盾を生きる臨床心理学の実践そのものを反復していると考えられるからである。

ニーチェは、『ツァラトゥストラはこう言った』(1883年)のなかで次のように語っている。

すべての書かれたものなかで、わたしが愛するのは、血で書かれたものだけだ。血をもって書け。そうすればあなたは、血が精神だということを経験するだろう。他人の血を理解するのは容易にはできない。読書する暇つぶし屋を、わたしは憎む。

臨床心理学の文献研究とは、臨床心理学という学問／実践が抱える葛藤／矛盾と自らの血をもって格闘することなのではないだろうか。このようなものとして書かれ、読まれる「文献」は、すぐに使えるハウツーを手に入れるようなひとつの情報では決してなく、あるいは自説の根拠を固めるひとつの手段でも決してなく、自らの存在が問われ、変革を迫られるような対象であると言えよう。言い換えるならば、臨床心理学における文献研究とは、研究者の視点そのものがその文献研究を通じて何らかの変容を被る作業である、と表現できるかもしれない。

私たちは、自らの経験・体験・視点を乗り越えることがどうしても難しい。だとすれば、自分が経験していない事象を知り、自らの視点と体験を振り返ってその枠組みを真摯に見つめ直

す作業は、私たちの共感の幅を広げ、質を高めることだと言えるだろう。そもそもこれは、現在という地点から過去を読み解く歴史学の使命であり、重要な帰結であった。「歴史とは現在と過去との対話であり、歴史家と事実との相互作用の過程である」(Carr,1961/1962)。対話であり、相互作用であるということは、現在の歴史家に影響を及ぼさずにはいない。その影響とは“歴史家が、自分の書いている人々の心と何らかの触れ合いが出来なかったら、歴史は書くことができない”(Carr,前掲書,p31)がゆえに、“歴史には本来、描かれる往時の人びとに対する感情移入をもたらす作用があった”(與那覇,2021,p9)。

臨床心理学には、実践を支えるための理論が求められる。その理論は、単に実践に適用されるためのものではなく、実践と相互作用し、実践のあり方を変えていく。私たちの個人的な経験を越えて、目の前の相手であるクライアントから、他者から、そして文献を通じて全く未知の過去・歴史から学ぶことは、私たちが想像し、共感できる心的体験の領域を広げる。その相互作用の過程において、研究者／臨床家のあり方が不断に変化していく。

このような意味において、文献研究とは、実証研究を始めとする臨床心理学研究の枠組みを反省し、乗り越えていく作業ともなりうるのではないだろうか。文献研究はそれが深い対話として遂行されるならば、単なる知的な作業ではなく、やがて私たちが見えるもの、感じるものを確実に変えていき、学問としての地平、すなわち臨床心理学の専門性を明らかにするとともに、それを問い直し、メタとベタが循環する動的なプロセスをかたち作っていく。

ところで、歴史学と臨床心理学の接点から、エレンベルガーによる『無意識の発見』という途轍もない業績を思い起こされる人も多いただろ

う (Ellenberger, 1970/1980)。エレンベルガーは、シャーマニズムから力動的精神医学が発達してきた歴史を説き起こし、そして「創造の病」という観点を見出すに至った。そこには、苦悩のケアに関わって主客が融合するという根源的なメカニズムが垣間見られる。これは臨床心理学の学問的地平を明らかにした重要な研究のひとつであった。しかし、ここで留意しなくてはいけないのが、「権威者がこう言っているから」「先行研究ではこうだから」という姿勢、すなわち、文献あるいは文献研究が自らの視点を反省し、相対化し、乗り越えていくためものとしてではなく、単に自説を根拠づける「エビデンス」として扱われてしまう危険性である。それは、歴史学で言うところの「史実主義」に重なる問題点を持ち、本稿で検討してきた文献研究の意義を損なうものと思われる。

「史実主義」とは、現代の歴史学において世界的に広がりつつある、共感や感性の幅を広げるのではなく、他者との共感を破壊するような潮流のことを指す (與那覇、前掲書)。この「史実主義」では、A (個人でも集団でも) にとつての史実が、B の史実と抵触する。したがって、そこでは必然的に、どちらが「正しい」という根拠を巡る闘争が生じる。客観的な事実、つまりデータやエビデンスはそれを見る立場によって様々に解釈しうることは、多くの歴史家たちが指摘してきたことであつたにもかかわらず。

現代においてはこの「史実主義」に加えて、「歴史の無効化」あるいは時間軸を捉える意識そのものが消えつつあることも與那覇によって指摘されている。現代が歴史意識を失いつつあり、歴史を知ることによって共感を広げるといふよりもむしろ、他者との共感を破壊する史実主義が広がっているという事態は、臨床心理学において、多様な視点・他者の視点を孕んで広げて

いく事例性や物語性よりも、「何が正しいか」という実証性や客観性が重視される潮流と軌を一にはしていないか。臨床心理学における実証研究は、関係性やプロセスが抜け落ちているという批判を受けるのみならず、「史実主義」による闘争という観点からも検討されるべきなのではないだろうか。

他／多の視点に触れて共感を広げること、自らの現在の地点をより深く理解し、問い直していくこと。そうした作業は、実のところ歴史学と臨床心理学に不可欠であり、事物を対象化し、客観視するという自然科学の長所／陥穽であった特徴を乗り越えて、主体と客体が相互に関係しあつた世界観・価値観を創出する可能性をもった営みであるといえる。臨床心理学が実証的な潮流のなかで「史実主義」に陥っているとすれば、臨床心理学の枠組みを反省し、乗り越えていく文献研究が大きな可能性をもつように思われる⁷⁾。

まとめとおわりに

文献研究は、文献レビューからメタ分析に至るまで、研究者に必須の素養とされている。自然科学の手法を模倣することが難しいというデメリットは、臨床心理学における文献研究において、他には代えがたい価値となっている。すなわち文献研究は、人間が人間を探究し、研究の主体と客体が明確に切り分けられない学問／実践のあり方をまさに体現し、それを問い直すという使命を抱えているからである。そして、臨床実践の強度に翻弄されない理論や臨床のエッセンスの学びとして、研究者／臨床家の個人的かつ専門的な読みが問われることは、自らの心理学構築へとつながっていく可能性をもつだろう。

心理臨床の研究とは「クライアントの問いを

セラピストが問い続けること」だと、伊藤(2003)は記している。その代表たる事例研究(個別事例研究)は、個を突き詰めたところに臨床心理学の普遍性を見出そうとした研究方法であるけれども、事例を研究対象とするがゆえにどうしても語りえないこと、公にできないことも多々ある。

他方、文献研究とは研究対象を研究者/臨床家の視点によっていかに読み解き、言語化するかという臨床実践に近い作業を行いながらも、その研究対象と視点を広く専門家以外にも共有できるという点において、臨床心理学の研究者/臨床家の視点を世に問いやすい研究方法といえる。諸科学の専門性が細分化し、専門外の者にはその知見が共有しづらくなっている。しかし、臨床心理学が人間の生きることや苦悩に寄り添う学問/実践である以上、専門外の多くの人にも共有してもらえ文献研究の意義は改めて大きいと考える。そして、現代の社会・世界を理解するために過去を振り返る歴史学が欠かせないように、文献研究は、心理学が現代のこのころのあり方をより深く理解し、相対化し、のみならず現代の心理学のあり方そのものを反省するための唯一の研究手法となりうるのではないだろうか。

こうした臨床心理学らしい文献研究のためには、研究者/臨床家自身が「科学の知」と「臨床の知」、専門性と一般性、没入と俯瞰などといった多くの葛藤のはざまに身を置かなくてはならない。研究業績を上げるにも時間がかかる。しかし、文献研究のそうした苦労は、研究者/臨床家自身にとって実り多いものである。読み手にとっても同様であることを願うばかりである。

<付記>

本研究は JSPS 科研費 21K18349 の助成を受

けたものです。

注

- 1) そもそも心理学は、心という目に見えず、実体をもたないものを対象としており、人間(の心)が人間(の心)を研究対象としているという点において、根源的な主客の分離不可能性を抱えている(河合(1992)や齋藤(2018)などの議論を参照のこと)。これは二重盲検法やランダム化対照試験(randomized controlled trial: RCT)などといった厳密な客観化の手続きをとったところで解消し得ない。
- 2) 日本の臨床心理学において、個人心理療法を理想的なモデルとしたことが、データに基づくアセスメントや治療介入効果の実証研究を未発達にさせているという批判(下山, 2009)もあるけれども、実際に臨床に携わる者として、事例研究の価値は依然としてきわめて高いと思われる。
- 3) 『心理臨床学研究』に原著論文として文献研究が掲載されているのは、この20年間で祖父江(2004)の一本だけである。
- 4) ただし、筆者の研究は純粋な文献研究というよりも、研究対象(吸血鬼のイメージ、夢と臨床事例)、研究手法(ユング心理学の伝統的なイメージの拡充法と、どちらかというラディカルな内在的アプローチ)、そして研究の視座(臨床心理学、深層心理学とこころの歴史性)などを重ね合わせることによって、そのオリジナリティを担保しているといえる。なかでも、臨床事例に基づいていなかったとしたら、これらの研究はおそらく成り立たなかったであろう。臨床事例に始まり、イメージの意味を広げ深め、そのうえで臨床事例に回帰してくるという構造が、この研究に不可欠の骨格を成している。
- 5) それぞれ、村上春樹の小説『トニー滝谷』を題材として、いわゆる発達障害を抱える人の他者との出会いにくさについて取り上げつつ、「孤独」について考察したもの(井上, 2010)。転移/逆転移理論を概観したうえで、セラピストが自分自身の「心理学」を構築していく道筋を仮説的に示したもの(井上, 2015)。初学者の臨床事例体験をベースとして、心理臨床という営みがもつ根本的な「対称性」の様相を提示したもの(井上, 2016)。不登校について歴史的に振り返りつつ、原因論と目的論の観点から現代において不

登校に対応するための臨床心理学的な課題を整理したもの(井上, 2019)。人間において「発達」というものが線形的な時間軸によって捉えられる「直線的発達観」だけでなく、時に後戻りしたり、同時に複数の時間性が生きられるということを示したものを「円環的発達観」として示したもの(井上, 2020)。

- 6) ただし、最終的に角野は中井のもとで臨床を学び、学位を取得している。
- 7) 例えば、認知行動療法と深層心理学的心理療法の「史実主義」による闘争を俯瞰的に相対化した研究として、杉原(2020)が挙げられる。文献研究の可能性を示す好例であろう。

参考・引用文献

- American Psychological Association (2010): Publication manual of the American Psychological Association (6th ed.). Washington, DC. 前田樹海・江藤裕之・田中健彦訳(2011): APA論文作成マニュアル第2版, 医学書院.
- American Psychological Association SOCIETY OF CLINICAL PSYCHOLOGY DIVISION 12: APA (第12分科会) <https://div12.org/treatments/> (2021年9月27日閲覧)
- 網野善彦(2005): 日本の歴史をよみなおす, ちくま学芸文庫.
- 浅野正(2018): 性犯罪者のロールシャッハ群比較研究の文献展望, 心理臨床学研究, 36(5), pp556-568.
- Carr, E. H. (1961): What is History?. Macmillan. (清水幾太郎訳(1962): 歴史とは何か. 岩波新書.)
- 千葉友里香(2016): 心理臨床におけるイメージとイメージを体験する主体との関係性について, 心理臨床学研究, 34(5), pp532-542.
- Ellenberger, H. F. (1970): The Discovery of the Unconscious, New York, Basic Books. (木村敏・中井久夫監訳(1980): 無意識の発見(上・下)―力動精神医学発達史, 弘文堂.)
- Freud, S. (1917): Eine Schwierigkeit der Psychoanalyse. 新宮一成・鷺田清一・道旗泰三・高田珠樹・須藤訓任編, 家高洋訳(2010): 精神分析のある難しさ, フロイト全集 16, 岩波書店, 45-56.
- 古川裕之(2015): 心理療法としての風景構成法: その基礎に還る, 創元社.

- Hillman, J. (1964): Suicide and The Soul, London: Hodder and Stoughton. (樋口和彦・武田憲道訳(1982): 自殺と魂, 創元社.)
- 菱田一仁(2019): 「造り物」の観点から見た箱庭と箱庭療法, 箱庭療法研究, 31巻3号, pp. 27-38.
- 井上嘉孝(2007): 吸血鬼と恐れの変容―心理臨床における異界との関わりについての一考察―. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, pp72-84.
- 井上嘉孝(2010): 苦悩という体験の心理学的理解―村上春樹『トニー滝谷』における出会いと孤独を手掛かりとして―, 矢野智司・桑原知子(編): 臨床の知―臨床心理学と教育人間学からの問い, 創元社, pp141-160.
- Inoue, Y. (2011): Contemporary consciousness as reflected in images of the vampire, JUNG JOURNAL: Culture & Psyche (International quarterly published by the C.G. Jung Institute of San Francisco), Vol.5:4, University of California press, pp83-99.
- 井上嘉孝(2013): 吸血鬼イメージの深層心理学―ひとつの夢の分析―, 創元社.
- 井上嘉孝(2015): 関係性から心理学へ―クライアントとセラピストのつながりに関する一考察, 帝塚山学院大学大学院心理教育相談センター紀要第11号, 37-50.
- 井上嘉孝(2016): 心理臨床家の人格と魂―初心から見た心理臨床―, 臨床心理学事例研究 京都大学大学院教育学研究科・心理教育相談室紀要, 第42号, pp13-16.
- 井上嘉孝(2019): 学校には必ず行かなくちゃいけないの?―不登校という生き方の臨床心理学, 竹尾和子・井藤元編: ワークで学ぶ学校カウンセリング, ナカニシヤ出版, pp76-89.
- 井上嘉孝(2020): 子どもっぽい大人は未熟か?―直線的発達と円環的発達, 竹尾和子・井藤元編: ワークで学ぶ発達と教育の心理学, ナカニシヤ出版, pp215-228.
- 井上嘉孝(2020) 怪物イメージの深層心理学試論―『フランケンシュタイン』と『どろろ』にみる宿命としての異界, ユング心理学研究, 第12巻, pp79-91.
- 猪股剛(2006): 文献研究の意義, あるいは魂の翻訳者の使命, 河合俊雄・岩宮恵子(編): こころの科学増刊 新臨床心理学入門, 日本評論社, pp103-109.

- 伊藤良子 (2003):心理臨床の研究—普遍性といかに
出会うか—, 臨床心理事例研究 京都大学大学院
教育学研究科 心理教育相談室紀要, 30, pp26 - 28.
- 岩宮恵子 (2016):増補 思春期をめぐる冒険:心理療
法と村上春樹の世界, 創元社.
- Jung, C. G. (1946):The Psychology of the Transference,
Die Psychologie der Übertragung, In CW16.
Rascher, Zürich. (林道義・磯上恵子訳 (1994):転
移の心理学, みすず書房.)
- Jung, C.G. (2009):The Red Book Liber Novus.
W.W.Norton & Company, Inc. (河合俊雄監訳
(2010):赤の書 The Red Book. 創元社.)
- 角野善宏 (1998):分裂病の心理療法, 日本評論社.
- 河合隼雄 (1992):心理療法序説, 岩波書店.
- 前田重治 (2003):芸論からみた心理面接, 誠信書房.
- 松木邦裕 (2011):不在論 根源的苦痛の精神分析, 創
元社.
- 中村雄二郎 (1992):臨床の知とは何か, 岩波書店.
- ニーチェ (1883/1967):ツァラトゥストラはこう言っ
た (上), 岩波書店.
- 日本学術会議 学術の在り方常置委員会 (2002):日本
学術の質的向上への提言 各分野の問題点の展
開 (各論) [1] 心理学, 日本学術会議, pp15-21.
- 西平直 (2010):「臨床の知」と「書物の知」—世阿弥
「伝書」からの問い, 矢野智司・桑原知子編:臨床
の知 臨床心理学と教育人間学からの問い, 創元
社, pp17 - 33.
- 大木秀一・彦 聖美 (2013):研究方法論としての文献
レビュー —英米の書籍による検討—, 石川看護
雑誌, Vol.10, pp7 - 18.
- 斎藤清二 (2018):総合臨床心理学原論 サイエンスと
アートの融合のために, 北大路書房.
- 佐々木玲仁 (2005):風景構成法研究の方法論について,
心理臨床学研究 22 (6), pp.33-43.
- ショウベンハウエル (1859/1960):読書について他二
篇, 岩波書店.
- Shamdasani, S. (1995):Jung Stripped Bare by his
Biographers, even. Karnac. (河合俊雄監訳 (2011):
ユング伝記のフィクションと真相. 創元社.)
- 芝田和果 (2021):日本昔話の臨床心理学研究序説—
『日本昔話大成』に描かれた「狂」を中心に—,
京都文教大学大学院 臨床心理学研究科 博士学位
論文.
- 下津咲絵 (2016):精神疾患のセルフスティグマに関
する実証的研究の動向, 心理臨床学研究, 34 (3),
pp342-351.
- 下山晴彦編 (2009):よくわかる臨床心理学 改訂新版,
ミネルヴァ書房.
- 祖父江典人 (2004):共感の2種, 心理臨床学研究, 22
(1), pp1-11.
- 杉原保史 (2020):心理療法において有効な要因は何
か? - 特定要因と共通要因をめぐる論争-, 京都大
学学生総合支援センター紀要, 49: 1-13.
- 鶴田英也 (2020):「根づき」の心理学—その論理性と
動きに着目して, 箱庭療法学研究, Vol.33, No.1,
pp65-74.
- 矢野智司・桑原知子編 (2010):臨床の知—臨床心理
学と教育人間学からの問い, 創元社.
- 東畑開人 (2020):平成のありふれた心理療法—社会
論的序説, 森岡正芳編:治療は文化である—治癒
と臨床の民族誌, 臨床心理学, 増刊第12号, 金剛
出版, pp8 - 26.
- 與那覇潤 (2018):日本人はなぜ存在するか, 集英社文
庫.
- 與那覇潤 (2021):歴史なき時代に, 朝日新書.

Abstract

Uniqueness and Speciality of Literature study in Clinical Psychology.

Yoshitaka INOUE

The purpose of this study is to examine the significance and issues of how literature study contributes to clinical psychology. Although literature study is the basis of all research, it is often neglected as science. In addition, there are few articles that have taken up literature study as a research method for clinical psychology. Types of literature study include literature review, meta-analysis, and rare literature research. Literature reviews are considered to be of low originality and academic value, but are essential for any paper. Meta-analysis and rare literature research provide new paradigms and perspectives for the research area, and have high originality and academic value. Literature study is important for clarifying the horizon in a certain discipline, reexamining its framework, and generating original hypotheses.

In particular, clinical psychology, in which the subject and the object are undifferentiated and has a complicated process, has characteristics closer to literature study than research that imitates the natural sciences. In addition, the practice and training of clinical psychology are supported by theory. Literature study is a process in which each researcher / therapist learns and thinks about the essence of clinical practice. The gap between clinical experience and literature sublimates clinical experience into psychological theory. Literature study in clinical psychology bridges the wisdom of practice and the wisdom of science, and has the potential to shape and transform the researchers / therapists themselves and the academic horizons of clinical psychology.

Key words : literature study, academic horizon, sublimation of clinical experience